

一章 見知らぬ青鬼？

幻想郷、人間と妖怪が共存する日本から隔離された箱庭のような小さな世界。科学だけが発展する現代社会では想像もつかないような世界だった。魔法や様々な術が知れ渡り、妖怪、妖精、幽霊、神が当たり前のよう存在する。

ここでは日本の常識は一切、通用しない。万が一に人間が幻想郷に迷い込み、妖怪に見つかればエサとなる。それが幻想郷のルール。運よく博麗の巫女や妖怪より強い人間に出会う事ができればもしかしたら元に戻る術があるかもしれないが……もし、人外に出会ってしまったら……為すがままに食べられてしまうかもしれない。

木の影でじっとしてうつむいている人間らしき人影。

青い衣服は幻想郷の住人とは明らかに違う。

恐らくは外から来た人間なのだと通りすがりの妖精は思った。

「あの人間……迷ってるんだ。良い事、思いついちゃった」

ニヤリと笑う妖精。

この人間を迷わせ、妖怪に食べられる所を見たい。

妖精にとってそれは子供が蜘蛛の巣に引っかけ、捕食する姿を楽しむ感覚に似てるのかもしれない。妖精にとつて人間の命などその程度しか思っていないのだ。

「よかったら道を教えてあげよっか」

肩を叩いた刹那、振り向いた青色の大きな顔面が迫る。

角が無いものの、鬼の形相そのものだった。

「ウホッ!? 良い男……なんちゃって……ひいっ!? ごめんなさい人間だと思ったので!？」

青い顔面がぬうつと迫り、鬼はぼそりと呟くように言う。

『……フ……やらないか?』

直感的な危険を感じ、妖精はその場から逃げ出していた。

「な、なんなのあれ!? まさか妖精を好んで食べる妖怪なの?」

妖怪……? 悪さや攻撃をしない限り、大抵の妖怪は妖精を攻撃したりしないはずなのだ? もちろん妖

怪に対して怨みを持たれるような事は何もやってはいない。

博麗神社の境内に入る妖精。

しかし、それでも青鬼は追ってくる。博麗神社では人間は襲ってはいけない決まりになっているが、妖精がそれに適応されるかどうかは微妙だった。

『……フ……やらないか？』

ぼそりとしたような声で【やらないか？】という言葉に絶望的な思考が駆け巡る。妖精は小さい容姿からか、性的な欲求をぶつけてくる妖怪が稀にいるのだ。

境内で古びた祠が見え、木戸を開けてその中へと入る妖精。

古びた祠の木戸には窓が一つも無い。様子を見る事は困難だが、捕まるよりはマシなのかもしれない。

——何分？ 何十分経ったのだろうか？ 恐怖で時間の感覚が麻痺している。

——もう出て良い頃合だろうか？ 足音も声も聞こえない。

もしかしたら不審な妖怪を見た巫女が青鬼を退治したのかもしれない。もしくは巫女が恐くて探すのを断念したのかもしれない。

ゆっくり木戸を開けた瞬間、青いコントラストが視界を覆った。

青鬼の顔面が迫り……

アッー！！

妖精の悲鳴が博麗神社に響き渡った。

「この男に見覚えはありませんか？」

「だから知らないって言ってるじゃないのよ！」

玄関で新聞の記事を見せる射命丸文。

記事の写真には角無しの青鬼の面を被った何者かが弾幕で妖精をスリングショット撃ち落とす姿が映されていた。

「この連続妖怪、青鬼通り魔事件。博麗神社で起きています。霊夢さんが事情を何か知ってるのではないかと睨んでるんですよ……神社付近に居たのに気づかなかったというのですか？」

「妖怪や妖精は多く退治してるけど、この件に関しては全く知らないわよ！ 第一、犯人は男の人間でしょ？ 全く関係ないじゃないのよ！」

文の視線が急に怪しむ目つきになる。

「はて？ 私は男の人間とは一度も言ってないんですが……この写真だけで、人間だと分かるのはさすが巫女ですね」

「な、なに言ってるのよ！？ さつき男の人？ って、言ったじゃない！」

「男とは言いましたが、人とは言っていません。この写真記事だけで、人間とは分かるとはさすが博麗の巫女ですね」

写真を示す文の指先には青鬼の姿。それは到底、人間には思えない。

「しまっ！？」

思わず口を押さえる霊夢。

「最近、人間の少年を居候させているという噂を耳にしますが、それと何か関係あるのではないですか？」
「無いわよ！」

ピシヤリと戸を閉める霊夢。

「勇氣！」

勢いよく障子を開ける霊夢にビクリと小動物のように身体を震わす勇氣。

「な、なに！？」

お茶を零しそうになる勇氣は構わずどかりとちゃぶ台の前に腰を下ろす霊夢。

「これからずっとあれを維持しなさいよ！」

「ええっ！？ どうして？」

「バレそうなのよ」

「もう止めようよ……こんな事して点数を稼いでも、罪の意識だけ重なるだけのようない気がするよ」

「罪の意識って、何よ？ 私は妖怪や妖精は問答無用で退治してるわよ」

幻想郷の外の世界の高校生、斉藤勇氣は自殺しようと思意識した事からスペルカード戦で百勝しなければ、八雲紫によつての妖怪の食料として提供されてしまうのだ。

もちろんもう死にたいとは思わないし、食料にされるのは絶対に嫌だ。しかし、半ば強制的に辻斬りのような勝負をして勝ち進むのは罪悪感を覚える。

「でも、絶対に悪い妖怪や妖精ばかりじゃないのも巻き込んでる気がするよ。今回の妖精さんだって気遣って声をかけてくれた妖精さんだったもん。戦う時に凄く罪悪感が……」

ちゃぶ台にうな垂れる勇氣。

「妖精なんて人を騙してけらけら笑っているような奴ばかりよ。罪悪感を覚えるような輩じゃないわよ」
そう言ってお茶を飲む霊夢。

「霊夢は妖怪や妖精が犯罪者みたいな事を言うけど、まだ何もしてない妖怪や妖精達を退治するのは過剰防衛な気がするよ」

「可哀想だとか、過剰防衛だとか……そんなんで人生やってけるの？ あんたの為に……っとり早く帰れる方法を作っただけだよ」

青鬼の仮面を投げる霊夢。

仮面は、にとりという河童に作らせた物らしい。仮面にしては生物的な禍々しさが感じられる。

「ボクは……」

ガタッ！？

物音がする方向を見ると、障子の穴からカメラのレンズが覗き込んでいるのが見える。

「この！ 腐れパラッチ！」

駆け寄り、障子を開ける霊夢。

「毎度、お馴染みの射命丸文……」

そこにはカメラを持った山伏姿の黒髪の少女が一人。カラスのような翼を携えている事からこの者が霊夢の言っていた天狗の新聞記者らしい。

問答無用で払い棒を振り下ろそうとする霊夢から逃げる文。

風を帯びて高速で飛んで逃げる文。負けじと霊夢はそれを追いかける。



空を飛ぶ霊夢は文に追いつくのがやつとのように思えた。

だが、霊夢から札らしき物が誘導ミサイルのように舞う。それを何とか避ける文だが、残像を帯びて高速化する霊夢に追いつかれる文。

光の糸を帯びた無数の札が囲み、文を捕らえた。

閃光を放ったかと思うと、錐揉みしながら落ちていく文。

——いくら妖怪といえど、大丈夫なのだろうかかと心配になる。

「わっ!？」

突然、目の前に現れる霊夢。

「ネガを取ってきたわ」

嬉しそうにカメラのフィルムらしき物を投げ渡す霊夢。

「文さん大丈夫かな？」

「そうね……釘を刺しておかないと駄目かしらね」

「そうじゃなくて文さんの身体が……」

「なに？ それともトドメを刺した方が良いかしらね」

拳を握りしめる霊夢。

わざと聞き間違えているのだろうか？

「いや……な、なんでもないよ」

霊夢なら本当にトドメを刺しかねない。

「良い天気よね。こんな日は飲みに行かないと損よね。勇気、あんたも行くでしょ？ 八目鰻屋の屋台」
空を見上げ、伸びをする霊夢。

「ボク、未成年だし……あーいう所は……」

「飲みに行くのか？ そいつは良いな」

目の前に落ちてくる黒白の魔法使い、魔理沙。

「それじゃあ、決まりね。それとも勇気は留守番してる？」

「分かったよ……ボクも行けば良いんでしょ」

留守番をしても良かったが、魔理沙が加わると、仲間外れされたようで嫌だったのだ。

「頼むぜ勇気。お前が行けば飲み代が安くなるからな」

笑って肩を叩く魔理沙。

八目鰻屋の屋台の店主、ミスティア・ローレイはスペルカード戦をしたのち、仲良くなった妖怪の一人だ。かつてミスティアは勇気を食べようとしていたが、今は笑って話し合える友達のような仲だ。

最近では人肉を好んで食べるような事はしなくなったという話だ。

「悲しみに包まれて妖精郷はあー、肥沃な黒土に覆われたく♪」

八目鰻屋の屋台で、気持ち良さそうに歌うミスティア。

「相変わらず五月蠅い歌だな」

「五月蠅い五月蠅いも静かなうちよ〜」

「あんまり五月蠅い歌を歌うと、勇気を連れて帰るぜ」

魔理沙の言葉に目を輝かせ、勇気の方を向くミスティア。

「勇気？ 勇気！？ 来てくれたのね！？ 最近、来ないから心配してたのよ」

駆け寄り、勇気の手を握るミスティア。

「そんな久しぶりかな？ 一週間前に来たような気がするけど」

「霊夢や魔理沙ばかり来てたから長く感じられたわよ。歌を五月蠅いとか言うし、値段を踏み倒すわ。勇気がいない毎日なんて地獄よ」

「えっ？ そうなの？」

霊夢と魔理沙を見比べるように見る。

「何だ？ この屋台は客を差別しすぎじゃないか？」

「希望通りに勇気を連れて来たんだから安くしなさいよ！」

「そうだ……ボクもこっちのお金を持ってないんだ」

いつも必要な物は霊夢が用意をしてくれていた。もちろんこういった飲食代も霊夢が出してくれていた。

「あなたにもお金が必要よね」

霊夢が紙包みを渡す。

「良いよこんなの！？」

「氏子の給与よ。いつまでも文無しじゃやっていけないでしょう？」
「でも……」

戸惑っていると、構わず霊夢が懐に紙包みを入れる。

「勇気、お金無いの？ 私が奢ってあげるわよ」

「そんな！？ 悪いよ!？」

「さすが話の分かる夜雀だぜ」

「霊夢と魔理沙は別よ」

「ケチな店主だぜ。繁盛してないのかねえ」

文句を言いながらも座席に座る魔理沙。

「勇気も座ってね」

勇気と霊夢が席につくと、三人は適当な酒とつまみを頼んだ。

霊夢と魔理沙の顔が朱に染まり始めた頃。

「ミステリア！ 追加の鰻まだ？」

酔った霊夢が台を叩き、料理をせかす。

「飲みすぎだよ霊夢」

その行動に呆れ顔の勇気。

「ちよっと待ってねタレを切らしちゃって……予備のタレを……きやつ!？」

壺を置いたはずみにタレが跳ね、ミステリアの顔と服を汚す。

「だ、大丈夫ミスティア!？」

勇気が心配すると、ミスティアは手ぬぐいで顔を拭き、笑顔を見せる。

「大丈夫よ。予備の服はあるから」

「予備の服って、ミスティアはいつもその服だよ。他にどんな服を持つてるの？」

ミスティアがいつも着ている普段着のジャンパースカートのような服はどうも料理をするには不向きな気がした。

「これと同じだけど、黄緑色の服ならあるわよ」

「なんか……2Pカラーみたい」

なぜか某アクションゲームの弟を思い出してしまった。

「ところで勇気、霊夢にいくら貰ったんだ？」

魔理沙に言われ、紙包みを開けると、数個の一銭と二銭の銅貨が数枚出てきた。

「えと、一銭が三枚で、二銭が二枚だから……七銭？」

「七銭!？ そりゃあ無いぜ霊夢……自分だけ暢気にお茶飲んで勇気に掃除ばかりやらせてこの給与か!？」

「何よ？ 入っていたなら良いじゃない!」

「でも、ボクたいした事やってないし、簡単な家事くらいしかやってなかったから……」

呆れ顔の魔理沙。

「ミスティア……これで何が買えるか教えてやるんだ」

「そうねちようどこに良いのがあるじゃないの……はい、八目鰻の串焼きお待たせ」
皿に出されたのは八目鰻の串焼きが一つ。

「えっ？」

「それが七錢だぜ」

「私も家計が苦しいのよ」

「家計が苦しい奴がこんな所で何で飲んでるんだ？」

「熱爛、まだ？」

「はい、熱爛、お待たぜ。熱爛も七錢ね」

構わず熱爛で一杯やり始める霊夢。

「呆れて何も言えないぜ」

「でも、迷惑かけられないし、居候だから」

串焼きに敷いていた新聞紙を何気なく広げる霊夢。

「あのパラッチ！？」

新聞紙を持つ霊夢の腕が震え、怒りを露にする。

「どうしたんだぜ！？ そんな鬼みたいな顔して？ それだから鬼巫女なんて言われるんだ」

「これよ！」

タレ塗れの新聞紙を屋台の台に叩きつける霊夢。

写真には青鬼の仮面を勇気に渡す姿が載せられていた。

「通り魔、青鬼の犯人と巫女が共謀……まぬけなだな。撮られたのに気づかなかったのか？」

「ネガを取ったのにどうして……」

「日付が一週間前になつてゐるわね……文は元から知っていて聞いていた訳ね！」

くしゃりと新聞を握りつぶす霊夢。

そこに屋台を覗く文。

「良い記事が書けたので、久しぶりに飲みに来ました。景気の方は……」

一瞬、場が凍りつく。

霊夢と視線が合うと青ざめる文。

「この！ 外道天狗！」

「店で暴れないで！？」

ミステリアの屋台に文の悲鳴が木霊した。

二章 小さな賢将

屋台からおぼつかない足で立ち上がる霊夢。

「もう帰るわよ勇氣……」

「うん……つて、ちよつと！？」

フラフラと歩き出す霊夢に肩を貸す勇氣。

「すまないわね勇氣」

「全く情けない巫女だぜ。こんな時に妖怪に襲われたらどうするんだ？」

そう言っ立ち上がる魔理沙も足がおぼつかないように思える。

「ええっ！？ 魔理沙まで……」

倒れそうになる魔理沙を抱える勇氣。

「良かったら送って行くわよ。この辺は人間の消える道だから妖怪の狩場になってるのよ」

「大丈夫だよ。ミステリアも片づけがあるでしょ」

「そうだけどね……でも……」

「霊夢に結界の護符貰ってるから大丈夫だよ」

そう言っ護符を見せる勇氣。

「分かったわ……危ない妖怪に会ったらこっちに戻ってくるのよ」

「うん。ありがとう」

ミステリアに手を振り、霊夢と魔理沙の肩をかつぐ勇氣。

「とは言ったものの、帰れるかどうか不安だよ」

既にミステリアの屋台との距離は明かりが見えない所まで歩いている。

「大丈夫よ勇氣！ 妖怪が出たら問答無用で退治してあげるわよ！」

勇氣から離れて歩く霊夢。威勢は良いものの、未だに倒れそうである。

「そうだけ勇氣。私のマスタースパークが火を噴くぜ！」

そう言いつつも肩を借りてる魔理沙。

「いや……大丈夫じゃないよね二人とも!？」

「何よ……ピンピンしてるじゃない」

「そうだけ……力尽きたんだぜ……」

その言葉を最後にバタリと倒れる霊夢と魔理沙。

「ええっ!? 満身創痕!？」

「まさか妖怪と戦う前から満身創痕とはね。君が噂の通り魔か？」

月明かりに宙に浮く人影。

シルエットからすぐに人では無い事が分かる。

灰色の髪の上にはネズミの耳、両手には二つのダウジングのような棒を持ち、その細長い尻尾には籠があり、ネズミが入っているのが見える。

「ボクを倒しに来たの？」

「違う違う。わざわざ妖怪や妖精の為に通り魔を倒すなんて事はしないよ。私の小ネズミ達は食欲旺盛でね。」

可哀想だが、一人残らず食べさせて貰うよ」

スペルカードを掲げるネズミ妖怪。

「あいつはナズーリンよ……守りが堅いから気をつけ……」

そのまま寝込んでしまう霊夢。

「ちよつと霊夢!？」

「よそ見していると、弾幕に当たるとよ」

「うわあああつ!？」

二条の青い光線が目の前に迫る。

霊夢を下ろし、ギリギリで飛び退く勇気。

「この距離でビジーロッドを避けた!？」

「勇符! ブレイブショット!」

勇気がスリングショットを引き絞ると、白い光を帯びる。

「少しはできるみたいだね。じゃあ、これはどうかな? 守符 ペンデュラムガード」

五つの青い巨大なペンデュラムがナズーリンの周囲を回りながら青い弾幕を吐き出す。

無数の弾幕が身体に擦れ、血の線を作っていく。

——懐に入ってショットを放てば行ける。

駆ける勇気は弾幕を避けながらナズーリンの距離を縮めていく。

「ブレイブショット!」

数メートルの距離でスリングショットの紐を離すと、スイカ大の光弾がナズーリンに向かって飛ぶ。

「残念だが、無駄だよ」

ペンデュラムがナズーリンを覆い、勇気の光弾を弾く。

「そんな！？」

「お返しだ」

ナズーリンのロッドから赤い光弾が放たれる。

赤い光弾を避けきれずに当たり、吹き飛ばす勇気。

その刹那、勇気の目にスリングショットが燃え尽きるのが見えた。

「……スリングショットが……」

転がり、倒れる勇気はピクリとも動かなくなる。

「他愛もないね……さて、どうやって料理するかが」

——何だか凄く身体が熱い。

——それに何だかネバネバと纏わり付く感触と乳製品が腐った匂いがする。

「お目覚めかね？」

目を開けると、ナズーリンが覗き込む。

「ここは何処？」

身体を動かそうとすると、黄色い物が餅のように粘ついて手足すらまともに動かす事ができなかった。黄色物の何かが身体をコーティングされているようだった。右には霊夢と左には魔理沙が寝ている。円形状に寝かされ、同じように黄色い物でコーティングされている。

「命蓮寺の特別厨房だ。寝ている間に服をひん剥いて、ピザと一緒に蒸し焼きにしたのだよ」

「ピザ！？」

どうやら黄色い身体を覆っている物はチーズらしい。

「安心すると良い。すぐには殺しはしない。もう少し下ごしらえをしてからだ」

「止めてよ！ ボク達を食べても美味しくないよ！」

「人間はみんなそう言うんだ。さて、巫女から下ごしらえといこうか」

そう言っただけでナズーリンはチーズでコーティングされた霊夢の胸を撫でさす。

「ううっ……」

胸を触られ、呻く霊夢

「この巫女、思ったよりも胸があったようだ」

「霊夢！？」

「こっちの感度はどうかな？ 巫女のソースは実に美味しそうだ」

ナズーリンはチーズ越しに霊夢の股間を撫で始める。

くちゅっ！？ くちゅっ！？ くちゅっ！？

撫でるナズーリンの手から怪しくぬめる音が響く。

「うううううっ!？」

霊夢の身体が魚のようにビクンと跳ね、チーズが糸を引く。

「霊夢に手を出さないで！」

声を上げる勇氣に睨むように見るナズーリン。

「じゃあ、君からいくか？ 下ごしらえをした後、食べやすいように手足や首を切られる事になるがね」
ナズーリンに股間を触われ、身体を震わす勇氣。

「ひぐっ!？」

「敏感すぎじゃないか？ それにもうこんな大きいのか……君の白いソースは美味しいか分からないが、存分に出すが良いよ」

チーズ越しに勇氣の股間を捏ね回すナズーリンの手が徐々に早くなっていく。

そしてしだいに粘液の音が響き渡る。

くちゅっ!？ くちゅっ!？ くちゅっ!？

「そろそろかな？」

強く握るナズーリンの手、それと同時にチーズの糸を引きながら勇氣の身体がビクンと跳ねる。

「ひぐううっ!？」

「少し汚らしいが、こっちで楽しませて貰おうか」

ナズーリンは裸足で勇氣の股間に足を乗つける。

「やめて!？」

「君のモノが足蹴にされているが、男としてプライドはズタズタだな
足で股間を握ね回すナズーリン。」

くちゅっ!?!? くちゅっ!?!? くちゅっ!?!?

「はうっ!?!？」

「ふむ……そろそろ搾り取れるかな？」

ナズーリンが強く踏みつけると、勇気の身体が再び、チーズの糸を引いて跳ねる。

「うにゆうううっ!?!？」

「死にたいと言えば、すぐにナイフでバラバラにしてあげても良いんだ」

——こんな惨めになるのなら……いつそ死んだ方が良いのだろうか？

——いや、駄目だ! 霊夢を守れずに死ぬのは絶対に嫌だ。せめて霊夢だけでも助ける方法を……

「馬鹿みたいに病み付きになってしまったようだね。まあ、良い。そのまま白いソースを出し続け、美味しいピザになるが良い!」

ヴウーン!?!?

虫の羽音に似た響きと共に何処からか落ちるように現れたのは紫だった。